

アフリカの伝統的遺産

その弾力的価値観と変化する慣習

ジェス・N・K・ムガンビ

栗原淑江 訳



1. はじめに

アフリカの伝統的遺産をめぐる議論のなかで、きわだつて多いのが、連続性と変化に関するものである。アフリカ社会が変化するとき、その伝統的遺産のどの面が保たれるべきであろうか。だがこの重要な問題を決定すべきであろうか。本論文では、その変化の過程を分析し、連続性と変化はあらゆる文化に不可欠なものであり、議論されようとしてまいと存在することを示したい。こうした事柄をめぐる問題は、現在のアフリカのサハラ以南

の国々にもびつたり当てはまる。それは特に、諸外国（特に欧米、またアラブと東洋）の文化がアフリカの伝統的遺産にとつて望ましいものであるかどうかを考える風潮があるためである。

自らのルーツを再発見し、承認し、古代にまでとづけた文明だけが、世界史上で重要な影響を与えてきたことは注目される。ルーツの再発見という課題は思想的に遂行されるものである。そして、この課題を遂行する責任は、そのための技術を訓練され身につけた知識人たちに課せられている。アフリカにおいては、あらゆる分野

の学者たちは、その個人的信念がどうであれ、こうした仕事を自らの責任ととらえるべきであり、思想的関わり

の基盤とすべきである。

2. いくつかの例証

文化の復興は、過去への盲目の回帰でもなければ、未来への盲目の跳躍でもない。過去は現在に再生しており、その再生が未来への展望を容易にする。

目下の文脈からすると、故 S・M・オティエノ氏の埋葬をめぐる論争は、墓をどこに置くべきかという問題をこえて、はるかに深い意味をもつものであったことがわかる。裁判所の事例をみると、ケニアの人々は、アフリカの文化的、宗教的な遺産が、急速に社会的に変化する国家におけるアイデンティティの危機を解決するための基盤になりうるかどうかに関心を抱いていたことがわかるのである。

論争の一方の側は、「近代国家」ケニアでは旧来の慣習は維持されたいものであり、「穏当な」礼儀の妨げとなるものであると主張した。反対の側は、アフリカの

アイデンティティはそれらの慣習にもとづいているという理由で、慣習を賞賛した。双方とも、自らの立場を主張するうえで、非常に強力な論点をもっている。しかしながら、両者の断定的な立場は、現在のケニア社会が保守的傾向と変革的傾向の両方の特徴をもつという明らかに社会的事実を過小評価していたように思われる。どんな社会にもこうした二つの傾向は共存しているが、哲学的、人類的視点からみると、そこには何の矛盾もないのである。あらゆる国の文化のダイナミズムは、この二つの極端な傾向間の緊張が社会の建設的、実利的な変革のための新たなモデルと展望を生み出す程度によつてはかられるというのは、信頼しうる仮説である。⁽¹⁾ この点を例証するには、中国、インド、西欧とラテンアメリカの四つの事例が役立つであろう。

二十世紀初頭、押し寄せる欧米文化に直面した中国の愛国的な学者たちは、いかにしたら自国の文化的アイデンティティと国家の威厳をもつともよく保てるかについて激しい論争を行った。⁽²⁾ 何人かの学者は、中国の学問が基礎構造を形成すべきであり、西欧の科学技術は実践的

に利用されるべきだと主張した。この立場は、西欧の科学技術を受け入れると同時に、中国の伝統的な哲学、倫理と社会的構造を振興することをめざしていた。ここで前提とされていたのは、人間性と社会の研究が文化の基盤を形成するということと、他国の科学技術が輸入されたとしても文化的アイデンティティは保たれうるということであった。しかし、この前提は誤っていた。科学技術は決して文化的に中立ではないからである。科学技術は特定の文化的状況のなかで発展してきたものであり、科学技術という媒体を通して文化的諸価値が保たれ、維持され、修正され、広まるのである。それで、このアプローチは失敗し、中国は内的崩壊と外的圧力によってアイデンティティを失い続けたのである。

こうしたアプローチの失敗は、一九一九年の五四運動でみだつてみられた新たな運動を導いた。その新たなアプローチは、中国の伝統的遺産を損なっても、西欧文化の技術的、社会的特質を取り入れようというものであった。この運動の目標は中国の西欧化であり、そうしたアプローチのみが、中国が世界の強国に「追いつく」こ

とを可能にする確信された。この運動もまた失敗したが、それは、中国の伝統的遺産を外国の文化によって置き換えることが難しかったからである。

中国の独創的なキリスト教神学者でありエキュメニストであるC・S・ソン(C.S. Song)は、次のように指摘している。効果的で意味のある社会変革を人々が経験するためには、過去は現在の新たなカギに転置(transpose)されなければならない、現在も未来の新たなカギに転置されなければならない、と。二つの文化が接触するところでは、両文化は互いに融合しなければならぬ。⁽³⁾それは、単なる模倣でもなければ、無批判な混合でもない⁽³⁾。

世界で第二に人口の多いインドは、記録された長い歴史をもつ国の一つである。(イスラム教とキリスト教のぞく)世界宗教のいくつかは、インドに起源をもつ。インドは、過去、現在、未来のあいだの緊張にいかに対処してきたであろうか。この三つの時の次元は、現在のインド文化に同時に存在している。インドは、アフリカ、アジア、ラテンアメリカの諸国家のなかで、もっとも工業化した国の一つである。しかし、半数以上の人々は、伝

統的、地方的に生活している。インドでは熱心に学問が行われているが、多くの人々はまだ基礎的な読み書きの能力をもっていない。マハトマ・ガンジー(Mahatma Gandhi)は、法律家としての教育をうけ、英国で弁護士資格をえた。それでも、ガンジーは、英国の伝統ではなく、インドの伝統にしたがう指導者になったのである。インドのナショナリズムに刺激を与える源泉は、欧

米の政治制度ではなく、インドの長い文化的、宗教的伝統の遺産である。とはいえ、インドの憲法は、本質的には、近代西欧のナショナリズムのなかで成文化された権利と特権を保証しようとしている⁽⁴⁾。

西欧の人々は、ラテン民族やイスラム教徒の支配に對抗して、自らのアイデンティティを鍛え上げるために「ルーツ」を再発見しようとしたが、そのときかれらが再発見し回復したルーツは、かれら自身のもものではなかった。アングロ族やサクソン族が、古代ギリシアや古代ローマにルーツを主張できる根拠があるだろうか。にもかかわらず、ルネサンスは、ギリシアの神話や伝説についての研究やローマの偉業についての研究で満ちてい

る。イスラム文明が西欧全体をほぼ征服した事実にもかかわらず、イスラム教徒とユダヤ人についてはほとんど研究されていない。このことは、現在において過去が回復されるときには、過去は実践的価値および思想的価値として扱われることを示している⁽⁵⁾。

ラテンアメリカにおいては、ラテン以前の歴史の再発見は、当地の学者たちに新たな要として、こゝを与え、学者たちはそれをもって世界に影響してきた。ラテンアメリカでは長いあいだカトリックがとりでを構えていたにもかかわらず、二十世紀が終わりつつある今、キリスト教神学のなかでもっとも創造的で建設的な思想がそこから起こっている。変革への力が、表面的には保守的なそのような状況から生じるのはなぜであろうか。過去、現在と未来は、緊張のなかで共存している。そしてこの緊張は、社会的、技術的変革へのエネルギーを供給するのである⁽⁶⁾。

以上のような例証から、何が学べるであろうか。次の諸点が明らかになるう。

(a) 意識的に過去を再発見しようとする努力は、現在に精通し、未来のための計画を立てるうえでの基礎を与え

る。

(b)再現された過去は、けっして現実の過去と同一のものではない。

(c)過去を再発見するという課題への取り組みは、認識されているといえないにかかわらず、思想的な取り組みである。

(d)過去の再発見に取り組まなければ、いかなる国家も、世界に影響を与えるように組織されることもなければ結集されることもない。

(e)技術的、科学的な成功は、文化的再発見に直接的に係っている。

裁判所の処置が多くの人々の怒りを生じさせたとしても、S・M・オティエノの事例が引き起こした論争、興味と関心は、明らかに有益なものである。ケニアは、国家として、保守的傾向と変革的傾向のあいだの緊張に対処する必要性をいっそう認識するようになってきた。したがって、現在と未来のためにアフリカの過去のどの面が示され奨励されるべきかという問題は、方向が誤っており、誤って定式化されているのである。その問いに答

その弾力性を助長している。ある集団が他の集団によって侵略され、征服されるとき、征服された集団には新たな規範、制度や社会構造が押しつけられるかもしれない。征服された人々は、生き残るために、表面的には征服者の文化を受け入れたようにみえる。しかしながら、かれらの文化は潜行し、機会が生じるやいなやふたたび浮かび上がるだろう。

文化が、抑圧された時代のうちにふたたび出現するときには、抑圧されなければ必要なかったような特有の順応や思想的防衛が加えられているかもしれない。このことは、あらゆる文化に一般的にいえることであり、世界史上の数多くの事例がそれを例証している。中国、日本、イスラエル、近代西欧、アラブ文明の再出現——これらはみな、その事例である。十五、十六世紀のヨーロッパのルネサンスは、おそらくもっとも興味深い事例である。西欧の人々は、アラブ文明と退廃したローマ帝国を目のあたりにして、ラテン民族とアラブ民族が作り上げた遺跡のうえに自身の文化と聖堂を再建しようとした。西欧のルネサンスと宗教改革は、西欧文化の自己主張とい

えようとすれば、誤った答えと誤解をまねく結論がもたらされるだろう。焦点は、外国の諸文化に当てられなければならない。アフリカの人々は、自国の伝統的遺産と融合させるために、それらの諸文化のどの面を取り入れるべきであろうか。文化のもつ弾力的な価値観は、つねに、内的葛藤と外的圧力によって変化する程度よりもまざっている。もっとも重要な問題は、いかに外国の文化に対処するかであって、いかに自国の文化を保つかではない。自国の文化を保つのは、当然のことなのである。

3. アフリカの伝統的遺産の弾力的諸側面

弾力性とは、引つ張られたり、圧迫されたり、押されたりしたあとに、すばやく元の形や状態に戻る能力あるいは特性である。ゴムは弾力性をもっている。すなわち、ゴムには伸ばされても元の長さに戻る性質がある。バネも弾力性をもっている。押されても、その圧力が除かれたのちには元の長さに戻る。生物有機体は、内的、外的緊張の双方に対応して変化するとき弾力的である。

文化も、大きな弾力性をもっている。文化の複雑性が、

う同じコインの両面である。

こうした歴史の教訓にもとづいて、ここでは、西欧の帝国の崩壊直後におけるアフリカの自己発見の特質を明らかにしよう。文化の復興は、歴史上ふつうにみられる過程である。この問題が論議されようとされまいと、地方や都会に住む一般の人々は、自然および社会的生活の限界と束縛の範囲内で、それにふさわしい生き方をするであろう。

弾力性をもっとも明らかにみられるものとして、文化の三つの側面がある。それは、基本的世界観、基本的価値観、および社会構造である。文化のこれらの側面、特に世界観と価値観は、非常に抑圧にも持ちこたえるものである。この三つの側面のおのをおの、詳細に検討してみよう。

4. 基本的世界観

アーサー・ケストラー(Arthur Koestler)は、その著『夢遊病者(The Sleepwalkers)』において、(西欧の)人々の世界観の変化をあとづけた。かれによると、西欧ではそ

の知的伝統の黎明期から現在にいたるまで、さまざまな世界観が存在した。それ以前の世界観を発展させる見解もあったが、ときには後退する思想もあった。ケストラーの書は、同じような世界観だけを描いているわけではないが、西欧の知的伝統においては、人間は自身を自然の他のものから孤立したものとし、自然を思索、操作、搾取の対象としてきたことを指摘している。

自然に対するこうした態度について、チャールズ・バーチ (Charles Birch) はさらに明快に、しかし批判的に述べている。バーチは、高名な生物学者であり、功利的な目的のためにはなく本来の自己理解のために人間が自身を自然の不可欠な一部とみなすような新たな世界観を主張している。

この問題を論議するにあたって対処しなければならぬ点の一つは、ケストラーが指摘するような社会科学、自然科学の双方における西欧中心主義の強調である。西欧中心主義は、たとえば、歴史や世界の変化を考察する際に、西欧の文化および思想に直接的に影響を与えた文化——特に、エジプト、アラブ、ペルシア、ユダヤとい

ンド文化の科学への貢献——に興味を集中させる。しかし、それらの国々の貢献は、西欧の知的伝統の歴史が示されるときに言及されるにすぎない。極東やアフリカ、アメリカの人々の伝統的遺産は、西欧の歴史の一部を形成しない。それらの伝統的遺産は、それ自体、けつして重要でないものではない。

アフリカの人々の基本的世界観は、西欧の伝統にみられるそれとは異なっている⁽⁸⁾。ある世界観が他の世界観よりも「進んでいる」かどうかが重要なのではないということは、強調されるべきである。そのような比較は、まったく適切ではない。というのも、いわゆる「進んだ」世界観は、実際には、人間がもつとも望ましいとする目的——平和、調和、安全と自己実現の保証——の達成に役立ってはこなかったからである。逆に、そのような世界観は、大いなる技術的成功にもかかわらず、戦争、不調和、不安定、欲求不満によって特徴づけられてきたのである。

アフリカの伝統的遺産においては、世界は統合した現象とみなされ、肉体的にも知的にも人間はそこから分離

できないとされる。神、人間と自然は、概念的には別個のものではあるが、ほどこことができないほど関連している存在論的カテゴリーである。動物、植物と無生物は自然の不可欠な一部であり、人間と同様に注目され敬意を払われるに値するとされる。

こうした世界観においては、神は、西欧中心主義的な一神教で主張されてきたような「人格神」ではない。あらゆる代名詞が自己矛盾することなく神に適用できる。神は、「あなた (you)」、「汝 (thou)」、「それ (it)」、「かれ (he)」、そして「かのじよ (she)」と呼ばれるのである。このような世界観は、神の自己顕現の様相を制限する世界観よりは、はるかに非差別的なものである。

アフリカの人々の世界観は非常に弾力的なので、それは数世紀にわたる抑圧のちにふたたび出現するであろう。西欧において、ギリシアの科学がほぼ二千年のうちに再出現したことが、これを例証している。あらゆる文化の認識論的な基盤は、その文化の基本的世界観である。文化の他の層は、征服や内部崩壊によって深刻なダメージを受けるかもしれないが、基盤はそのまま残る傾向が

ある。

アフリカのサハラ以南の国々を西欧諸国が短期的かつ暴力的に征服したのち、アフリカ文化の基盤は完全に破壊されたかのように見えた。しかし、二十世紀が終わりに近づき、二十一世紀が始まる⁽⁹⁾とき、復興したアフリカが世界史に登場する。

パン・アフリカニズムは、脱植民地化の道を敷いた。そして、同じような運動が、それを脅威とする人々からの思想的、宗教的、あるいは技術的抵抗にもかかわらず、この復興に勢いを与えるだろう⁽¹⁰⁾。

5. 基本的価値体系

あらゆる文化は、「基本的世界観」とよばれる基層の頂点に「基本的価値体系」とよばれるもう一つの安定した層をもっている。この層は、基層にもとづく実践的および論理的意味内容から成っている。

チャールズ・バーチは、ギリシア的な西欧の世界観とそれに由来する価値体系を批判する際に、次の命題を定式化する⁽¹¹⁾。

(a) (経験) 科学に源泉をもつ世界観は、科学が行われている社会を反映する。今日優勢となつている科学技術的な世界観は、自然の支配に熱心な社会から受け継がれている。この世界観は、それが由来してきた源泉を反映しているのである。

(b) こうした見解においては、宇宙とそのなかにあるすべてのもの(生物体を含む)は、手段と考えられる。この見解は、自然を工場のようなものととらえ、人間と対抗するものととらえるような自然観をもたらしただ。

(c) キリスト教神学(特に西欧の)は、科学の機械論的な世界観にいやいやながら順応したので、自然と人間、神をまだ分離している。

(d) この優勢な機械論的世界観は、一神教的であろうとなくろうと、現代にはまったく適用しえないことがわかった。それは生態学的ではなく、人間性を奪うものである。

(e) 驚異や神秘に満ちた宇宙と出会った人間は、この優勢な科学技術的世界観に異議を申し立てる。その異議申し立ては、主として、科学やキリスト教神学のないと

ころから起こっている。

(f) 自然、人間、神についてのいっそう生態学的な見解を見いだそうとするそうした異議に応えるためには、過去に支配的であった信仰と科学の関係が変化することが必要である。

(g) 現在なされつつある信仰と科学の新たな協力においては、森羅万象の統合、すなわち自然、人間、神が一つであることが認められている。そして、科学的な洞察だけでなく人間の特性も重要なものと考えられている。

(h) 自然、人間と神についてのこうした生態学的な見解は、あらゆる生命への無限の責任だけでなく、あらゆる生命を包含する生命倫理をも含んでいる。こうした新たな倫理と新たな展望は、生態学的に耐えうる社会、まさにグローバルな社会を構築するための基盤を提供するのである。

バーチが論じるような価値体系は、アフリカの伝統的遺産においては当然のものと考えられる。それは、大部分、アフリカに優勢な世界観のゆえであるが、その世界

観は非常に統合的なので、無制限な自然の操作を許さないものである。ギリシア的な西欧の世界観は、アフリカの伝統的遺産のような統合的な世界観によってバランスをとる必要がある。他方、アフリカの伝統的遺産もまた、きわめて人間中心主義的な世界観と価値体系の相互作用の結果として歴史の中に現われた変化に適応する必要がある。

アフリカの価値体系は、個人の利害より神と共同体を重んじる。個人は、かれが属する共同体によってのみ自らを同一化することができる。共同体自身、神との関係によってのみ自らを同一化することができる。アフリカの伝統的な価値体系においては、生命は非常に貴重なものである。生命は、再生によってではなく出産によって、世代から世代へと伝えられる。産児制限のキャンペーンがあまり成功していないのは、こうした理由からである。ギリシア的な西欧の価値体系においては、経済活動のもっとも重要な側面は生産と生産性であると考えられる。そして、生産と生産性の量と質を求めて能率が計算される。絶え間ない利益が、経済活動の成功の最終的な

指針となってきた。それとは対照的に、アフリカの伝統的な価値体系は、利益を奉仕や人間関係より優先することはない。ギリシア的な西欧の価値体系においては、時間と空間は売買されるものであるが、アフリカの伝統においてはそれらはかけがえのないものである。アフリカにおいては、時間、空間と物質に関わる売買は儀式であり、象徴的なものである。他方、ギリシア的な西欧の価値体系においては、それらは契約によって保証されたものである。

ジョン・ハブグッド(John Habgood)は次のように書いている。「原始的な」文化に対立するものとしての科学的文化においても、人々はまだ自然の一部と考えられている。しかし、強調点はまったく異なっている。自然は、人間的関わりや共感によってではなく、調査によって知られ、理解されるべきであるとされる。世界は、人間にとって関係のない諸対象の集まり(人間がその一つであるかぎりを除いては)として研究されなければならない。と。ハブグッドが注目するのは、(ギリシア的な西欧の)「科学的」価値体系は、宗教的な問題に十分に答えることが

できないと思われることである。神は、対象あるいは概念として考えられなければならない。もし対象であるならば、科学的知識が進展するにつれてわれわれの図式に占める神の場所がますます小さくなると思われる。もし神が概念ならば、宗教は個人的幻想とみられる⁽¹¹⁾。

アーサー・ケストラーの、ギリシア的な西欧の知的伝統にみられる世界観の変化に関する歴史的研究を思い起こすと、はたして「科学」を原始性と対照させるのは正しいのかという疑問がわく。科学の前提のいくつかは、知的には素朴で複雑なものではないだろうか。たとえば、近代の科学技術を絶対とする信念は、人間がその限界や可能性、資源について多く知るようになれば認められなくなるだろう。それでも、あらゆる面において人間は技術志向的な価値体系に舵をとられ、自身と自然からますます離れるような冒険に乗り出すのである。

ケストラーは、その研究の末尾で、ギリシア的な西欧の伝統的遺産の直接的な後継者に対して、自己批判的な指摘を行っている。すなわち、「現実の数字的な側面に対するわれわれの催眠術的な隷属状態は、量的でない道

徳的価値の知覚を鈍くさせる。結果が手段を正当化するという倫理は、われわれの墮落の主要な要因である⁽¹²⁾。と。逆に言えば、プラトンの完全無欠な領域への妄想の例、アリストテレスの周囲の空気によって矢が進むという例、コペルニクスの四十八の周転円とかれの道德的臆病さの例などがある。ティコの壮麗狂、ケプラーの日射病、ガリレオの信用詐欺と、デカルトの脳下垂体魂は、電子頭脳をもつて道德的真空に君臨する新たな偶像への崇拜者の酔いをさます効果があつたかもしれない。

ケストラーが次のように述べていることは、正しいであろう。すなわち、「近い将来、(ギリシア的な西欧の)人間は自らを破壊するかあるいは星にむかつて飛び立つだろう。道理にもとづく議論が、究極的な決定に何らかの重要な役割を果たすかどうかは、疑わしい。しかし、もし重要な役割を果たすとするならば、現在の状況をもたらしただ理念の展開過程を明確に洞察するのは意味のあることだろう⁽¹³⁾」。

実際、ギリシア的な西欧の価値体系は、ケストラーが予示したような二つの方向を追求してきた。科学技術は、

生命の完全な破壊の方向、および星に向かってギアが入れられているように思われる。

別の価値体系が支配的になるべきである。しかし、それはギリシア的な西欧の世界観からは生じえない。ギリシア的な西欧の文明は疲弊しきっている。他方、他の文化的伝統は活気ある再発見へと弾んでいる。

6. 社会構造

文化の形態と内容の第三の層は、「社会構造」とよばれる。その構造は政治、経済、倫理、美学、形而上学などの文化の構成要素に相当する。それぞれの社会構造は制度から成っており、その制度はある目的を達成するために考案され、維持されている。以下では、そうした制度の概略を手短かに述べよう。

(1) 政治制度

「政治」は、広い意味では社会的勢力の分配として定義されるだろう。あらゆる文化は、その分配を容易にし統制するために、その目的にかなった制度を考案する。政治科学では、その制度は三つのカテゴリーに分析され

る。

立法は、国民を導くための法を制定する代表権を保証する制度と内容とする。それは、政党、立法議会、議事手続き、憲法、宣言、宣誓書、行動計画のような委任事項を含む。行政は、公的に予定されたすべての活動が計画通りに遂行されることを保証しようとするものである。それは、政府、警察、教育と基本的な奉仕を含む。

司法においては、制度は、設定された規則と手続きに応じた論議を行わせようとする。司法は、立法と行政が遂行する権力に一定の限界を与える。このカテゴリーには裁判所が含まれる。伝統的なアフリカ社会においては、こうした制度は明確に定められてはいないかもしれない。しかし、それらの制度によって明示される個々の規則をだれが遂行すべきかということが、あらゆる民族共同体のなかに明確に示されていることは、指摘されるべきである。

(2) 倫理的・美学的制度

社会には、道德と美的規範を打ち立て、維持するための制度がある。それらは、正式には政治構造によって統

制され規制されるかもしれないが、多くの側面は規制されない。必要が生じたときにはある側面が正式なものとなるかもしれないし、それらが退屈なものになり、退廃し、あるいは政府に対して激しいものになったときには、正式なものとはされなくなる。

通過儀礼——生まれてから死ぬまで、個人はいくつかの段階を通過するとされる。個人のアイデンティティを強調するギリシア的な西欧の伝統においては、比較的に年齢で社会的成熟が認められる。その年齢は、三十歳から、二十一歳、十八歳へ、そしてときには十六歳か十四歳にまでも引き下げられてきた。アフリカの伝統的遺産においては、人は肉体的に存在しているあいだ中、成長し続ける。すなわち、幼年時代から子供時代を経て思春期へ、そして成人初期、結婚、老人、死へと。死もまた、肉体からは分離しているが引き続き効力のある他の存在様式への移行とされる。

道徳規約——道徳規約は、人々が何をすべきであり何をしてはならないかを規定する。これは、強制装置が道徳性において特に定義されている点で、法的規約とは区

別される。法的規約は、法において特定されている。行動規範——行動規範は、あまり特定のではないが、それでも拘束的なものである。共同体の成員は規範を理解し、個人は騒ぎたてることなくそれにしたがうよう期待される。

(3) 経済制度
経済は、生産、加工、保管、移送と交換の方法を含んだ、資源の分配に関する制度である。経済はまた、関連するサービスと消費のダイナミクスを含んでいる。そうした制度は、(農業、漁業、狩猟、加工を含む) 商品生産、移送と伝達、輸出と輸入、保管と市場および交換を内容とする。

(4) 宗教制度
宗教制度は、その社会の世界観と価値体系の管理者として知られる。ふつう、宗教制度は他の諸制度よりも保守的であり、それが完全に変革するときには社会もまた内的変革をはっきりと外に表す。宗教制度は、儀礼、シンボル、礼拝式、教義および共同体組織をもつ。

社会構造、基本的価値と基本的世界観のレベルでは、

問題はより重大である。あらゆる社会はそれらのレベルでの変化に抵抗するだろうし、侵入する文化はつねにそれらのレベルで浸透しようとするだろう。これは、帝国列強が自国の社会制度をアフリカの社会制度に置き換えるようにしたやり方であった。

しかし、文化は弾力性をもっているため、侵略された文化が生き残るためを除けば、外国の文化をたやすく受け入れることはないだろう。のちに機会が生じれば、旧来の社会構造、価値体系と世界観はふたたび表面に現れるものである。

アフリカのサハラ以南の国々における状況もそうである。文化の現象学という観点からすれば、このことは奇妙でもないし異常でもない。そうした状況は、過去に他の文化でも生じてきたし、未来にもふたたび生じるであろう。

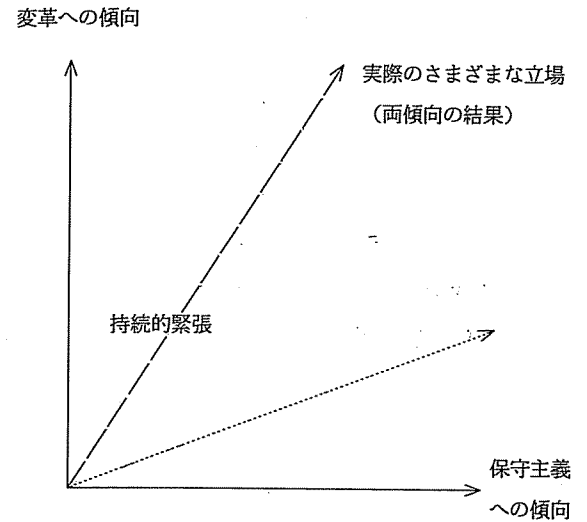
7. 社会変化への態度

ある社会にみられる変化への態度は、広範囲にわたっている。その範囲内での一つの極は、過去の業績は未来

に可能な、いかなる計画よりもよいものであると主張して、いかなる状況のもとでの変化にも反対し、過去への回帰を心に抱く。それと反対の極は、どんな犠牲を払っても即時の変化を支持し、奨励する。この両極のあいだに、多くの立場がある。あるものは保守に傾き、あるものは変革に傾く。その真ん中に、この問題について無関心で無知な人々がいる。この両極は、つねに持続的な緊張のなかにある。歴史において、特定のときに特定の社会がとる実際の立場は、この両極の相互作用の結果である。

保守的であれ変革的であれ、世論の形成により強く影響を与える極が、結果としてとられる立場にその傾向性を与える。保守的な極のほうが強ければ、結果としての立場は変化に水をさすものとなる。他方、変革的な極のほうが強ければ、結果としての立場は保守化をひどくさうものとなる。こうした分析モデルは、次のような図式で描かれる。

あらゆる社会において、多数の人々は、次の理由によって保守的な志向をもつ傾向がある。



(a) 多数派は、ふつう、変革的な思想に十分にまた効果的にさらされていない。というのも、教育は、あらゆる社会において保守的な性格をもつ傾向があるからである。

(b) 一般に、人々は、未知のものを恐れる傾向がある。その結果、変化への新たな提案は、社会の利益になるこ

とであったとしても、警戒やときには疑念をもって見られる傾向がある。

(c) 社会の多数の人々が、實際上、問題となっている事柄をめぐる議論に効果的に参加できるわけではない。特に子供と老人は、参加できない傾向がある。子供や若者、老人を合計すると全人口のかんりの割合を占めるようなわれわれの社会においては、特にそうである。それに加えて、読み書き能力の欠如が、参加のレベルを低くしていると思われる。その結果、多数派は、論争が続くあいだ、より影響力のある方向づけに沿って動かされる傾向がある。

このように考えると、効果的な社会変革への努力にとつては、社会の多数派が当然とし、受け入れてきたすべての前提、慣習、伝統、信念や実践を考慮することが得策である。「通過儀礼」が国家の発展に果たす役割は、こうした文脈で考えられる。

出発点は、アフリカの人々のあいだでは「通過儀礼」が生活の不可欠な一部であるということの認識である。この儀礼は、アフリカ文化が生き、組織され、理解され

る場である。

8. 通過儀礼

通過儀礼 (rites of passage) という用語は、個人の誕生から死にいたるまでの、人生のある段階から次の段階への移行を刻印するために、共同体が伝統にしたがって取り決めるさまざまな儀礼をさす。主要な「通過儀礼」は、誕生、思春期、結婚と死に関するものである。

アフリカでは、「通過儀礼」は、個人が共同体の一員としての責任を自覚し、持続的にそれを思い起こすための方法として理解されている。成熟は、年齢によってではなく、個人が、その個人的な成長のあらゆる段階において、属している共同体の期待に応える程度の直接的な割合によって定められる。「通過儀礼」は、共同体が抱く積極的な価値を準備し、検討し、承認し、強化するために取り決められ、維持される。

アフリカの思想においては、生は、あらゆる面で持続的かつ統合的な過程として理解される。生は破壊されえない。倫理的に表現すれば、生は破壊されるべきではない。

い。人間が肉体的に死んでも、それは終わりではない。

人間は血や肉や骨以上のものだからである。ある人間の生は、他の人々の生と共存しており、周囲の他の生物や無生物と共存している。それゆえに、他人の幸福や環境を害することは、自分自身の生命を害することである。

アフリカの伝統的な物語や神話が、「むかしむかし……」で始まり、「それで今まで続いているんだよ」で終わっているのは興味深い。ある状況下では変化が起こるかもしれない。しかし、終わりは思いもおよばぬことであろう。空間においても、生はまた持続的である。空間的な限界は、個人と共同体の能力によって設定されるのである。あるものが拡大しようときには拡大する。あるものが伸びるときには伸びる。つねに他の人の保全是保証され、環境に関しては自然のバランスが大事にされている。

時間と空間において生は統合的で持続的な過程であるという信念は、つねに、共存と相互依存という不可侵の原理へと導く。ある特定の共同体の世代がある特定の時にこの原理を尊重すべきことは、自明の理とされている。

それを冒そうとするものはだれでも、共同体全体の幸福を害するものとみなされる。ある世代の成員は、たがいに尊敬しあうべきであるだけでなく、他の世代についても責任をもった行動をすべきであるとされる。そして、そのような行動は、男性と女性で分担されている。

子供は、保護、指導、食物、庇護を求めて、古い世代に依存する。老人は、支持、世話と安楽を求めて、若い世代に依存する。青年は、困難な成人期への移行を行うとき、忍耐と理解を求めて、古い世代と若い世代の双方に依存する。若い成人は、結婚して親になる準備をするときに、励ましと道徳的（ときおりは物質的）支えを求めて、共同体全体に依存する。こうして、全体社会はシンメトリックに組織され、あらゆる成員は、かれらを生み、育て、支えるシステムを尊重する義務を持つのである。

このような価値観は、いかに維持され強化されるのであろうか。「通過儀礼」は、人間の肉体的、社会的、感情的な成長の重要な時点に設定されている。「通過儀礼」を通過するのは各個人であるが、それはまた共同体全体の責任でもあることは強調されるべきである。

成人としての段階に加入させる。

結婚に関する儀礼は、未婚時代の終わりを刻印し、配偶者たちに（親として課せられるすべてのものを伴った）責任ある親となる準備をさせ、かれらを親としての段階に加入させる。

死は出産サイクルの終わりを刻印し、同時に次のサイクルによる生の再生を予期する。こうして、死は誕生を期待する。こう考えると、死は否定的にとらえられる必要はない。死は自然の秩序の不可欠な一部だからである。死に関する儀礼は、個人に、死の現実と不可避性に責任をもつて対処するための準備をさせる。それと同時に、死は終わりではないという信念を確認する。

誕生に関する儀礼は、死は生に打ち勝つことはないという信念を強化する。実際には、死にもかかわらず生は続くからである。共同体全体は、新生児を歓迎し、責任ある成熟へと導くことを準備し、勧める。同時に、両親、特に母親は、出産後の時期に必要な手当、世話と援助を与えられる。

概して、「通過儀礼」は、共同体のだれもが教師とし

「通過儀礼」は、イニシエーション (initiation) の儀礼である。以下は、共同体にそれをもつ意味である。それぞれの通過儀礼は、個人とその仲間を個人的成長の次の段階に加入させ、それ以前の段階の終わりを刻印する。次にあげるのは主要な「通過儀礼」であり、イニシエーションが強調する生の諸局面に対応している。

思春期……成人
結婚……親であること
死……生の再生（誕生）
誕生……子供（思春期）

これらの「通過儀礼」は、個別的には個人に、総体的には共同体に、生の次の段階に対して責任と勇気をもつて立ち向かう準備をさせるものである。

思春期に関する儀礼は、子供時代の終わりを刻印すること、青年に責任ある成人となる準備をさせ、青年を

てまた生徒として参加する、精巧な教育過程となっている。S・M・オティエノの事例は、現代の国家におけるそうした学習のための機会を提供したのである。

9. 国家的統合のために

私は、アフリカ社会における「通過儀礼」を、特にそれが外国の文化によって損なわれない状況のもとで果たすべき理想的な役割という点から検討してきた。この儀礼が主張する積極的な諸価値は、適切で効果的な国家発展のために奨励されるべき価値である。「通過儀礼」は、いまだ国民の文化的意識のための焦点でありうるのである。もちろん実際には、百年前と同じように現在も実践されているということではけつてない。そうすることは、国家の発展がめざす目的に反することになる。その目的とは、国家全体の幸福のために、われわれの社会を質的にも量的にも変革することである。

もし、われわれが、伝統的遺産の不可欠な一部をなす「通過儀礼」が主張する積極的諸価値を受け入れるならば、そしてまた、自らの（国家としての）社会を変革す

る必要をも受け入れるならば、われわれは今日の地方的および世界的な課題にいつそう効果的に対処することができるであろう。とすれば、われわれに与えられた道は、「通過儀礼」を、国家的規模で文化意識を向上させるための焦点の一つとする方途を見いだし、それをもって、自力での国家発展と国家統合のための強力な基盤作りに貢献しゆべしとなるのである。

註

- (1) S. M. ナナイエノの事例についての新聞版として、*The S.M. Oieno Case: Kenya's Unique Burial Saga*, Nairobi: Natin Newspapers, 1987. 448p.
- (2) 中国に関する諸名の資料として、C.S. Song, *The Compassionate God*, New York: Orbis Books, 1982, pp.11-12. を参照せよ。
- (3) C.S. Song, *op. cit.*, pp.11-12.
- (4) インペに関する部分の資料として、*ビルゴの文化* 469. 映画「ガンディー」Erik H. Erikson, *Gandhi's Truth*, New York: W.W. Norton, 1969, M.K. Gandhi, *The Bhagavad Gita*, New Delhi: Orient Paperback / Vision Books, 1926; S.Radhakrishna, *Recovery of Faith*, New Delhi: Orient Paperbacks, 1967; C.Shar-

man, *A Critical Survey of Indian Philosophy*, Delhi: Motilal Banarsidass, 1976.

- (5) 面欧の伝統的遺産に関する記述は、以下に掲げる諸研究にみえていよう。
- (6) 面欧の伝統的遺産に関する記述は、以下に掲げる諸研究にみえていよう。
- (7) 面欧の伝統的遺産に関する記述は、以下に掲げる諸研究にみえていよう。
- (8) 面欧の伝統的遺産に関する記述は、以下に掲げる諸研究にみえていよう。
- (9) 面欧の伝統的遺産に関する記述は、以下に掲げる諸研究にみえていよう。

- (10) 面欧の伝統的遺産に関する記述は、以下に掲げる諸研究にみえていよう。
- (11) 面欧の伝統的遺産に関する記述は、以下に掲げる諸研究にみえていよう。
- (12) 面欧の伝統的遺産に関する記述は、以下に掲げる諸研究にみえていよう。
- (13) 面欧の伝統的遺産に関する記述は、以下に掲げる諸研究にみえていよう。
- (14) 面欧の伝統的遺産に関する記述は、以下に掲げる諸研究にみえていよう。

in the African Heritage" を記述したものである。

(ナイロビ大学教授)

(ベロリン・ユニバー・東洋哲学研究所研究員)

- (1) Kenneth J.King, *Pan-Africanism and Education: A Study of Race, Philanthropy and Education in the Southern States of America and East Africa*, London: Oxford University Press, 1971.
- (2) Charles Birch, "Nature, Humanity and God in Ecological Perspective", in *Faith and Science in an Unjust World*, Vol.1, Geneva: World Council of Churches, 1980, pp.62-73.
- (3) John Habgood, *Religion and Science*, London: Mills and Boon, 1964, pp.136-43.
- (4) Arthur Koestler, *op. cit.*
- (5) Arthur Koestler, *op. cit.*, Penguin Edition, Conclusion.
- (6) 面欧の伝統的遺産に関する記述は、以下に掲げる諸研究にみえていよう。
- (7) 面欧の伝統的遺産に関する記述は、以下に掲げる諸研究にみえていよう。
- (8) 面欧の伝統的遺産に関する記述は、以下に掲げる諸研究にみえていよう。
- (9) 面欧の伝統的遺産に関する記述は、以下に掲げる諸研究にみえていよう。
- (10) 面欧の伝統的遺産に関する記述は、以下に掲げる諸研究にみえていよう。
- (11) 面欧の伝統的遺産に関する記述は、以下に掲げる諸研究にみえていよう。
- (12) 面欧の伝統的遺産に関する記述は、以下に掲げる諸研究にみえていよう。
- (13) 面欧の伝統的遺産に関する記述は、以下に掲げる諸研究にみえていよう。
- (14) 面欧の伝統的遺産に関する記述は、以下に掲げる諸研究にみえていよう。

Reality, Penguin University Books, 1971.

* 本論文は『アフリカの遺産と現代キリスト教』

J.N.K.Mugambi, *African Heritage and Contemporary Christianity*, Nairobi, Longman, 1989. の第九章「アフリカの伝統的遺産——その弾力的価値観と変化する慣習」"Resilient Values and Changing Practices